

た。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：どうも武井さん、ありがとうございます。ただ今のご報告は特に欧米といってもアメリカの研究、とりわけレイノルズ先生の研究を中心にお話があったと思います。また、日本で出された「帝国という幻想」の中での栗田先生とレイノルズ先生の若干の意見の違いについては、この後栗田先生のコメントの中でもまたご指摘があるかと思えます。それで最後に武井さんから、今までの日中関係という中で東亜同文書院を位置づけるのではなく、東亜同文書院が、あるいは東亜同文会と言ってもいいかもしれませんが、日中提携による支那の保全という目的を掲げたときに、当然欧米の中国に対する侵略ということがあるわけで、それを前提にしているわけだから、これからは今日のシンポジウムをふまえて、日本と欧米の相互認識の焦点として東亜同文書院を考えるという視点が必要ではないかというご指摘だったと思います。時間がだいぶおしていますので、質問は後でまとめて、最後のコメントの後の中に入れていただきます。武井さん、どうもありがとうございます。

引き続き栗田先生にお願いしたいと思いますが、簡単に栗田先生の紹介をさせていただきます。栗田先生は1977年に中央大学法学部をご卒業され、1988年明治大学大学院政治経済学研究科政治学専攻博士後期課程単位習得されて退学されています。現在は国学院大学文学部の講師をお務めになりながら、中央大学社会科学研究所客員研究員をされています。専攻としては日本政治外交史、及び日本政治思想史をおやりになっていまして、著書としてはなんとといっても新人物往来社から出ています「上海東亜同文書院」が、これが今までの同文書院の評価を変えた、そういう意味では画期的な著作だと考えられます。そのほか多数のご

著書及び論文がございますが、今日は時間の関係で省略させていただきます。それでは栗田先生にコメントをお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

栗田尚弥（国学院大学）：栗田です、よろしくお願いします。アメリカとフランスを代表される近代史の研究者、それからアメリカを代表されるライブラリアン、愛知大学が誇る若手研究者のご報告に対して私ごときがコメントを加えられるかどうかということがございますが、藤田先生のほうからやれ、と言われましたので、恥ずかしながらやらさせていただきます。ある程度のストーリーはお手元にあるペーパーに書いてありますが、急いで作ったもので、打ち間違い等が少しありますので、ご容赦願いたいと思います。

まず、このシンポジウムは3回目になりますが、最近非常に東亜同文書院に関する研究、報告が増えているようです。この愛知大学の図書館の成瀬先生によりますと、お作りになった目録等は同文書院関係目録を参考にさせていただきますと、戦前から1988年に東亜同文会の後進とも言うべき霞山会が東亜同文会誌を作った、その1988年までの間に世に出た東亜同文書院、同文会関係の刊行物は363点です。それに対して88年の同文会誌発刊以降2004年までには68点の本が出ています。第二次大戦後、1945年以降に限定しますと、終戦から同文会誌以前に刊行されたものは83点、これは論文、あるいは評論等も含みます。それに対して同文会誌は68点とその比率から言えば非常に高いと言えると思います。

この20年の間に同文会あるいは東亜同文書院に対する研究は確実に増えているといいと思います。しかも同文書院評価というのは、戦後長く続いてきたマイナス評価というものではなくて、きちんと資料を見てプラスとマイナス両方を

ふまえた上で、ちょっと同じ発音になってしましますが、総体的かつ相対的に同文会とか同文書院を歴史的に位置づけようというものであろうと思います。この傾向は日本のみならず欧米、あるいは中国においても見られると思います。この点については武井先生が非常に詳しくいらっしゃいます。まさに東亜同文会や同文書院についての国際的学際的研究は今高まりを見せていると。そういう中においてこの愛大のシンポジウムも非常に大きな意味をもっていると思います。各先生方のご報告に対して私なりの僭越なコメントを加えさせていただきたいと思います。

最初のダグラス・レイノルズ先生のご報告です。皆様もご存知のように先生が欧米における東亜同文書院研究の第一人者です。今回のご報告はまさに江戸時代からの日本の対アジア観、対中国観、そういう歴史の中で東亜同文会のスタンスについて論じられたもので、先生の日本史に対する学識の深さを物語るものであったと思います。

ところで、武井先生の先ほどのご報告によれば、レイノルズ先生と私の見解は真っ向からぶつかっているようですが、確かに小林英夫先生が編者でやられた『帝国という幻想』ですが、ここに収められた先生と私の原稿を読んだ方は、武井先生のような見解をもたれる方が多いと思います。私の筆の力の及ばぬことだと思うのですが。ペーパーには書いていませんが、この本を読んだ読者の方がインターネットで書き込みをやられていて、レイノルズ先生と栗田の間に果たして友情は成り立つのであろうかという疑問を提起されている方がいましたが、昨日はちゃんとビールで乾杯しましたので、そういう心配はございません。

武井先生がご指摘になられた、あるいはインターネットで心配された方もいらっしゃいますが、私はこの本の中でレイノルズ先生のご見解を決し

て全否定したわけではありません。むしろ意見を同じくする部分が多かったということをご申し上げておきたいと思います。この本のみならず、先生のお書きになったものと私の見解は非常に意見を同じくするところがあります。

たとえば、今日の荒尾精についてのご報告なのですが、どうも日本では孫文との関係が非常に深く、また左右を問わず、左翼の人にも右翼の人からも評判のいい宮崎滔天、有名な方ですが、この方が荒尾精のことを支那占領主義者と評価して以降か、あるいはそれだからかどうかわかりませんが、どうも最近まで戦後日本においては荒尾というのは中国侵略主義者の先兵であるという、先駆者のような評価をされていたと思います。実際荒尾自身が書いたものの中で日清戦争のときに書いた「対清弁妄」というのがありますが、その中で荒尾は皆さんご存知だと思いますが、要するにこれは中国のための戦いであるので、中国に対して領土であるとか、あるいは賠償金というものを求めてはいけないということを書いているにも関わらず、戦後は、これは宮崎滔天の影響かどうかわかりませんが、荒尾は占領主義者であるという評価がずっと続いてきたわけです。

しかし、先生は今日のご報告の中で、ペーパーは英語で書いてありますが日本語で申し上げます。要するに荒尾の貿易立国論というものは中国とアジアを再興し経済的に西洋に対抗することによって日中が富むものであると。そしてまた日清貿易研究所のような学校は西欧列強にはなかったような学校であるということをご指摘になられています。そしてこの日清貿易研究所の理想というものが根津一をはじめとする東亜同文書院関係者に引き継がれて、それが yet another Meiji innovation であったというふうに論じられています。

また今回のご報告ではあまりふれられていませんが、東亜同文書院を設立した近衛篤磨公爵、彼についても、これはいろいろと引用させていただきましたが、簡単に申し上げますと、日中友好論というものを考えた非常に優れた考え方をもった政治家であるとおっしゃっているわけです。要するに、同文書院、同文会の近衛篤磨、荒尾精、根津一、そういうパイオニアに対するプラス評価というのはまったく私と一緒にです。ペーパーには書いていませんが、私が先ほどご紹介いただいた『上海東亜同文書院』を書きましたときに、山本茂樹さんという若い研究者の方がちょっと論評を加えてくださいました。要するに近衛篤磨というのは今まで対ロシア強硬論という視点からのみ論じられてきましたが、栗田はこの中で、要するに良質のアジア主義者として近衛を捉え直している、近衛の評価を変えた、と論じてくださいました。私は何も新しい資料を使っていません。すべて刊行された資料で近衛論を展開したのですが、にもかかわらずあまり良質のアジア主義者としての評価を受けていなかったと。レイノルズ先生は、私がそれを書くよりも何年も先にそういう近衛評価をされていたということです。ですから、このパイオニアに対する評価というものは、失礼だとは思いますが、私と一緒にだと思います。

武井先生がご指摘になるところの、真っ向からぶつかっているかのごとき観を与えるもっとも大きな部分というところが、レイノルズ先生はミッションスクールが中国に思想的遺産を残したのに対して、同文書院はその種のものを残さなかったとご指摘になられたのに対して、私は東亜同文書院の性格は基本的にビジネススクールであると。そしてそれが目指したものは日本と中国を経済において結びつける日中の人材、特に経済人を養成することにより日中提携の基礎を築くことにあった。それゆえミッションスクールとは同じ土俵で論じられないのではないかと、そういうふうにあ

った点にあったと思います。私の筆足らずのところがあるのですが、厳密に言うところの点も真っ向からぶつかったわけではないと思います。

そもそも学校のもつ意味は多様です。たとえば中国に作られたミッションスクールというのは、やはり中国人の…このことはあまり好きではないという方もいらっしゃると思いますが、啓蒙、enlightenment ですね、それを一つの使命とする学校であったと思います。それに対して東亜同文書院、あるいはハーバードロースクールといった学校はいわゆる実学、ビジネス、あるいはローといったような実学を主とする学校であったということが言えると思います。それゆえミッションスクールを評価する目で東亜同文書院を見るとそこにある種のずれが生じ、逆にビジネススクールを評価する目でミッションスクールを見るとそこにもずれが生じることになるということは私が言いたかったことです。

生意気なようですが、今回のご報告でレイノルズ先生はミッションスクールではなくアメリカンビジネススクールであるサンダーバードスクールとの比較において東亜同文書院のスタンスを論じられています。非常に不遜な言い方ではありますが、レイノルズ先生の同文書院研究がさらに深まってこれたと思ひまして、それに対して我々日本の研究者はいい意味で対抗していったらいいのかということ、論文を拝見して考えた次第です。ですから、現在レイノルズ先生はどう思っているか私にはわかりませんが、たぶん今日辺りも一緒においしくビールが飲めるだろうと思います。

2番目のブルギエール先生のご報告ですが、これは武井さんのご指摘にもありましたように、私も語学的な問題もありまして、私のみならず多くの日本の方がそういう問題もあって、フランス、

あるいはヨーロッパの人々が、要するに英語圏以外のヨーロッパの人々が東亜同文会、あるいは同文書院についていかなる認識をもっていたかについてはあまり知らないと思います。この点を非常に明らかにされているということが、非常に面白かったご報告です。特に東亜同文書院というものがフランスの植民地、特にインドシナでのコロニアルスクールにある種の影響を及ぼしているというご指摘は非常に刺激的でした。

全体を拝見しまして個人的に、まず第一に興味をもちましたのは1905年にフランスの領事が日本というものは宗教ではなくて道徳的な同一性を武器としているというご指摘でした。根津をはじめとする東亜同文書院関係者、それから日本の多くの有識層、インテリゲンチヤがそうだと思うのですが、そういう人々は逆にキリスト教による中国への文化的侵略を恐れていたわけなのですが、逆に今回のご報告によって欧米列強は日本と中国の儒教に代表される文化的同一性を武器とした日本の勢力拡大を恐れていたことがわかりまして、武井先生のお言葉ではございませんが、まさにお互い何を思っていたかということを考える重要性を改めて認識しました。

また、東亜同文会、同文書院の役割について現地外交機関からの情報等を基に中国革命に日本の思想が影響を及ぼして、要するに新しい中国がジャパニーズチャイナとなるような認識をもつ方がいらしたということも非常に興味深いご指摘でした。さらにスクール・オブ・スパイ、要するに同文書院がスパイ学校ということはよく言われてきたことですが、欧米列強においてはすでにこの20世紀初頭からそういう認識がもたれていたことは非常に重要なご指摘であったと。このご指摘は、先ほどの武井先生のカートン大尉の例や、あるいはドイツ領事館の例にも通じるものだと思います。

私は以上のようなご指摘というのは武井先生がおっしゃるところの、まさに東亜同文書院について欧米がどういう認識をもっていたか、そしてそれを通じて日本と欧米の相互理解に非常につながるのではないかとというご指摘を改めて考える次第です。

ところで、改めて考えましたのは、東亜同文会とか同文書院に対するフランスの外交官内の認識が、たとえば第二次大戦中に宣伝された民主主義やファシズムに対するデモクラシーの戦いといったような普遍的なものからくる認識ではなくて、あるいはキリスト教的な使命感からではなくて、帝国主義の競争相手としての日本に対するある種の危機感から出発しているのではないかと考えました。これは非常に重要な問題ではないかと思っています。普遍的原理から同文書院を批判するのではなくて、まさにライバルとして同文書院の存在を見ていた。そういうことを考えることは非常に重要ではないかと思っています。

また、東亜同文書院をスパイ学校として見ていたフランスの識者たちは、同文書院を作った…これはレイノルズ先生も非常に高い評価をされているところの近衛篤磨や根津一のご精神、あるいはそれに基づいた建学理念、そういうことに対する理解をもっていたのかどうか。これはぜひ教えていただきたい点です。フランスの研究ということについては私は素人ですので、刺激的な研究でした。

3番目のニキ先生のご報告ですが、私はもうインターネットやコンピュータは素人ですので、ああ、すごいな、と思って聞いているしかなかったのですが、言うまでもなく同文会研究、書院研究、もちろん歴史研究全般において必要なのは資料、データです。日本においてもインターネットの普及によって、またデータベース化によって非常に資料の収集、公開が進んでいます。皆さんご存知

のアジア歴史資料センター、私も度々利用します。

そういう意味において、まさにニキ先生の報告はインターネット先進国、データベース先進国のアメリカにおける歴史資料の現在を教えてくださいの非常に良いご報告であったと思います。特にちょっと刺激的だったのは、ものすごく安い値段でオンデマンド版ができるというところで、要するに良い資料を持っているというだけではもはやだめになってくると。そうすると皆さんに資料が手に入るようになるというご指摘があったと思いますが、インターネットの普及というのは学者の存在そのものを変えてくるものではないかと。要するに日本でも…ここにいらっしゃる方はいらっしゃいませんが、単に古い資料を使っているから良い論文だと言う方がいらっしゃいます。ただし、今回ニキ先生のご報告になったような事例が進んでくると、もう資料を持っているかどうかではだめであって、まさにレイノルズ先生のように切り口が問題になってくると。これはもう我々学者として考えなければいけないことだと思います。単に古い資料だけにものを言わせるものはだめだということだと思います。

時間も迫ってまいりましたが、あと2、3分簡単に話します。ちょっと失礼なのですが。武井先生のご報告なのですが、もうこれは事実上これまでの報告は武井先生のご報告を基に話させていただいたようなものですので、改めて言うまでもないと思いますが、ご指摘になった、まさにその研究というものを日本のみならず中国、そしてヨーロッパ、アメリカ、それぞれの研究者が要するに相互の理解の下に研究を進めると。そして当時お互いに相手をどう見ていたかということが非常に重要な問題になってくるというご指摘ですが、私もそのとおりだと思います。先ほども言いましたが、たとえば同文書院、あるいはミッションスクールというものをお互いの人が、まさにライバル

がそれぞれの学校を見ると、もう本質とは違うふうに見えてしまうところがあります。そうすると相互理解ではなくて相互誤解がさらなる大きな相互誤解を生じるのではないかということを考えますと、武井先生のご指摘は非常に重要だと思います。

最後に、ちょっと私に2分間いただきたいのですが、同文書院の精神的遺産ということで述べたいと思います。端折ります。レイノルズ先生のご指摘になるように、思想的な遺産、これは基本的にビジネススクールであったということと、結果としておそらく8割9割の方が日本人学生でしたから、中国に思想的遺産、形而上的な遺産を残さなかったというご指摘は認めざるをえないと思います。ただし、私はそれでは何もなかったのかというと、そうではなくて、日本人学生に対する精神的遺産を残されたと思います。ある学校で、僕は先ほどビジネススクールと言いましたが、学校教育というものはいかに実学を教えるところであっても、精神的なものがなければだめだと思います。ある学校の教員室にいたときに私がびっくりしたのは、経営学の先生から、栗田先生、政治史なんかやっていて金になるのですか、と聞かれました。私はもうその人とは二度と口を聞けなくなりました。そういう精神的なものは非常に重要だと思います。

そのときに同文書院を考えると二人の人物、近衛篤磨と根津一という人物に突き当たるわけです。近衛の場合はレイノルズ先生がいろいろご指摘になっていますのが、あえて私はこの言葉…最近覚えた言葉なのですが、ノーブルネス・オブ・リッチと。これは白州次郎という方が非常に好きな言葉だったらしいのですが、要するに恵まれたものが国家なり国民なりにそれを還元する義務があるのだと。ノーブルネス・オブ・リッチ。これは恵まれたものというのは単に身分があると

かお金があるということではなくて、やはりエリートというものはある種の使命感をもって国際関係なり国民なりに尽くさなければならないという意味だと思っています。そういう意識を具体的には申しませんが、近衛篤磨は強くもっていた。そういうものがノーブルネス・オブ・リッチという概念がやはり同文書院に残ったのではないかと思います。

そしてこの考え方以上に重要なのが、まさに根津一の根津精神です。これまでいろんな方がご報告でご指摘になられていますが、根津先生の考え方の中心には儒教、特に陽明学がございます。陽明学というのは、簡単に言うと…東洋思想の専門家の方がいらして申し上げにくいのですが、簡単に言うと人の痛みを我が痛み、あるいは民の痛みは我が痛みというところがあるように思います。国家間で言うと、中国の痛みは我が日本の痛みと。そういう大同論、王道論に結びついてくることもございます。卒業生の回想によると、根津一氏は常にこの大同ということを非常に重視していたと。そういう考え方というものの、いわゆる根津精神というものが同文書院の精神、まさに近衛篤磨のノーブルネス・オブ・リッチとくっついて一つの同文書院の精神になり、それが受け継がれて日中間で活躍する日本人の人材が作られていったと思います。このような人材が作られたというのは日本のみならず中国にとっても非常にプラスであったのではないかと私は思います。

最後の最後に30秒だけ申し上げたいのですが。繰り返しになりますが、今や東亜同文書院の研究は国際的学際的ということが必要な時期にきていると思います。そして我々はそれをやるべきだと思いますし、アメリカ、ヨーロッパ、中国、韓国、日本の研究者がそれを協力してできると思います。これを皆様方にぜひやろうではないかと訴えて、このコメントを終わりにしたいと思います。

Yes, we can.

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：どうも栗田先生、ありがとうございます。今日のご報告の方、栗田先生も含めて壇上に上がっていただきまして、それですまずフロアからのご質問をいただき、同時に最後に栗田先生の各報告者に対するコメントに対してのお答えをいただきたいと思っています。どうぞ壇上に上がってお座りください。今日のご報告の順番にお座りいただきたいと思えます。最初に時間を申し上げます。一応先ほどもお話ししましたように最後に懇親会を予定していますので、ここでの時間をどんなに遅くても5時50分までにさせていただきます。したがって、最初にフロアから各先生のご質問なりご意見をいただきたいと思っています。それが出そろったところで、先ほどの栗田先生のコメント、各報告者に対してのコメントがあったかと思いますが、それをあわせて報告者の方に最後にお答えいただきたいと思えます。それではどなたに質問されるか、あるいは意見を出されるかを述べられて。はい、ではり一先生、お願いします。

リー（愛知大学）：愛知大学経済学部のリーです。レイノルズ先生に一つお尋ねします。ご存知のように東亜同文書院に関する歴史的な評価は、特にアメリカではエドガー・スノーの意見がこれまで支配的ではないかと。つまりスパイ学校という話です。特に歴史的なことを考えますと、エドガー・スノーほど中国に関する世界的なオピニオンリーダーはいませんので、だから彼の話はおそらく戦前戦中、それから戦後のアメリカ、ひいては世界に与えた影響が非常に大きいのではないかと思います。そこで、レイノルズ先生はそれは違うのだという意見を今より20年前に出されて、アメリカにおける東亜同文書院に対する評価はレイノルズ先生が本を出された当時、そして今、要するにレイノルズ先生の話とエドガー・スノーの話とどっ